

## ① 1年生は1人だけ

昭和 55 年 4 月、私は奈良県教育委員会学校教育課指導主事を拝命し、県内の多くの小・中学校を訪ね、理科の学習についての指導助言にあたることになりました。その最初の訪問校が野迫川村立北股小学校でした。

北股小学校は野迫川村では一番大きい学校でしたが、それでも全校児童は 20 人だけで、先生は 6 人でした。村内にはほかに 5 つの小学校がありました。昔、この村で銅鉾石の採掘が行われていたころには、もっと人口が多く学校の数も多かったそうですが、過疎化という言葉が一般的になってきたそのころから進められていた学校統合によって、今では 2 つの小学校だけになっています。



この学校は数年前から理科教育の研究を続け、第 24 回奈良県へき地教育研究振興大会の会場となっていたこの年には、「自分で手がかりを見つけ、みんなの力で道を切り開き、たくましく前進する子らの育成」をテーマにした研究を進めていました。中でも、1・2 年複式の O 学級と 3・4 年複式の M 学級では、このころ提唱され始めた同單元異程度の指導方法を確立することを目指していました。

初めて授業研究に参加したのは、5 月 28 日（水）でした。この日の 1・2 年複式学級での授業は「草花を育てよう」で「身近に見られる植物を探したり、育てたりさせながら、植物の著しい特徴や育ち方に気付かせるようにするとともに、植物に親しむ楽しさを味わわせる」が

両学年を通した目標でした。

1年生のS君が少し前に蒔いたアサガオの芽が出たばかりの日、「どんな花が咲くでしょう」という先生の問いかけに答えは1つだけです。多人数の学級だといろいろな考えが出てきて討論に進むのですが、ここではたった1つの答えしか出て来ないのです。ですから、日なたと日かげの違いを考えることになっている2年生も論議に加わります。それでも足りないときは先生もなかまの1人を務めるのです。

この日の授業の記録は、11月6～7日に開催された大会の参加者に配られた研究紀要に掲載されています。この授業記録からは、3人の子どもたちが計153回発言したことが読み取れます。153÷3は51です。1時間の学習の間になんと51回も発言しているのです。大勢の中に埋もれてしまいがちな多人数学級ではできないことです。

「少人数だからこそ、こんな学習ができるのです」

『へき地だからできない』ではありません。こんな自然がいっぱいあるのです」

そんな先生たちの意気込みが感じられる授業でした。

それから、20年近く過ぎたある日、私は、この村を通る高野竜神スカイライン沿いのレストランで、1人の女性に会いました。

「たしか、小学校のとき何度か授業を見てくださった先生ではありませんか」

それは1・2年複式のこのクラスの2年生の女の子でした。顔を覚えるのが何より苦手という私は彼女の記憶力に驚きました。彼女の話によると、彼女は、今、村に1つの保育園に勤めており、たった1人の1年生だったS君も村で働いているとのことでした。こうして村の文化が受け継がれていくのだと思いました。

話は変わりますが、私が小学校のときに学んだ学校は、1クラスが

23人でした。それが1年生から6年生を合わせた人数でした。全学年で1クラス、当然先生は1人です。こうした単級学校と呼ばれる学校は県内にもいくつかあったようです。こんな学校で学ぶことができたのは、教師であった父が、町の学校から丹波市第四国民学校藤井分教場に転勤したためでした。週に2時間、裁縫の時間にだけ来られる先生がおられました。常に勤務しているのは父だけでした。この年から2年間、私は父に全教科を教わることになりました。今とは違って保育園や幼稚園といった就学前教育を受けていない1年生、卒業を前に入学試験を受け、旧制の中学校や女学校、あるいは、農学校や商業学校に進学する6年生（義務教育は小学校だけでした）、そうした子ども23人の指導はどんなに大変だったろうと思います。

手のかかる1年生や入試間近な6年生に目が向くのは当然でしょうし、先生が出張となれば、子どもたちだけの学校になってしまいます。こんな日のために、父の作った学習カードがありました。2年生用から6年生用まで、はがき大のカードの表には計算問題が、裏には答えが書かれていました。ていねいに書かれたカードが今も目に浮かびます。こうしたカードで繰り返し練習し、答えを確認し、合格すれば、次のカードに進みました。どんどん進む子がいました。「走るのだったら誰にも負けないけど、計算カードは苦手だ」という子もいました。少ない人数の中で、友達の得意なところ、ちょっと苦手なところが分かっていました。互いに違いがあることを知り、認め合っていました。

低学年の子に分かりやすく説明してくれるお兄ちゃんがいきました。けんかしたとき優しく状況を聞き、注意してくれるお姉ちゃんがいきました。上級生が先生の代わりに務めてくれる学校、それは「教わる」というよりも「自ら学ぶ」という学校でした。次代に生きる子どもたちを育てる教育がこんな条件でいいとは思いません。しかし、「あれ

がないから、これがないから」ではなく、こうした条件の中で、どうするかを考えることが大切なのです。

ここで、これからの教育を考えていくために、父の残した記録から昔の学校教育をのぞいてみたいと思います。

私の父は、昭和2年、奈良師範学校を卒業後、奈良市立佐保小学校を振り出しに県内の小・中学校に勤務しました。そして、退職後、「あしあと」と題する書を刊行しました。A5判全4巻(738ページ)のこの書は父の特技を生かした本職顔負けの孔版(謄写)印刷です。A4判より少し大きい目の紙に活版印刷用のインキを石油で薄めたもので両面印刷し、2つ折りしてから綴じて断裁するなど、凝り性の父の性格が如実に表れています。こうした技術指導と表紙印刷、製本は懇意にしていた新踏社の安達友治氏(この書「先生してて良かった」の印刷をお願いした安達等氏の父君)によるものでした。以下は、この藤井分教場に転勤したときの記述の一部を、原文のまま横書きに変えて転載したもので、漢数字や句読点もそのままにしてあります。

.....

教員生活十七年、今までのほとんどを大規模校で過ごした自分にとって、この僻地の単級教育は実に急転直下、環境の一大転換であり、それに伴う種々の悩みが果てもなく自分を包んで苦しめ抜くのであった。一年から六年に至る複式、自分は小学生時代こんなクラス(注父が入学した奈良師範学校附属小学校に設置されていた複式学級)に学んだが、まさか因果応報でもなかろうが、誠に不思議な因縁とも言える。

山間僻地においては極端な小規模校が多くある。しかしそのほとんどはせいぜい三学年乃至四学年程度で、全学年という様なひどいケースはほとんど例が無いのではなかろうか。

しかもこれが町からいくらかも離れていない所に実在するのだ。そしてその稀に見るひどい環境に飛び込んだのである。全く手も足もでないとはこのことだろう。しかも長年高等教育を専門にやって来た自分が。幸いこの藤井の子供達は実に素直で、二十三名の児童が一つの家族の如く打ち解け親しんでいた。上級生は下級生の面倒をよくみてやり、また男女も絶対反目することなく、心から打ち解け、最も進歩した男女共学の実をあげていた。

こんな習慣はどれだけ自分の不慣れな教育を助けたことか、事実、高学年の児童達は、行き悩む自分をいかに励まし、協力してくれたことか分からない。赴任して先ず驚いたのは、よく見かける高学年男女の理由のない反目がなく、手を取り合って遊んでいることであった。

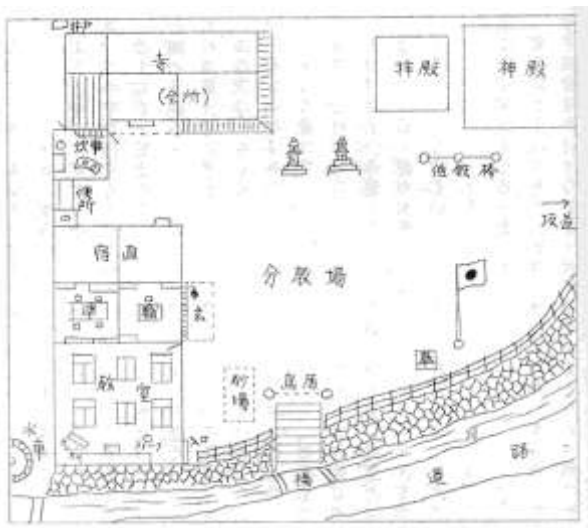
それが決して子供っぽいという原因からではない。すべてに厳しい生活環境を乗り越えて来ている彼等は、他に劣らずたくましく発育していた。ただ美しい自然に取り巻かれ、家族的ふんいきにはぐくまれて、いつまでも純真さを失わないというだけであった。(中略)

さて、何とか一通り整理を終わり、落ち着いて授業にはいったが、六箇学年の授業をどうやるのかの重要問題にぶつかった。複式の教育には全然経験がない。時間を配分すると、一学年あたり一時間の授業が僅か八分足らずになるのは厳然たる事実である。

いずれにしても今までの様に手をかけて児童の面倒をみるわけには行かない。結局は要点をしっかりおさえ、あとは自習というのが常識である。それにしても学年が多すぎ、児童の程度がやはりいささか不足である。優秀な児童ばかり集めた特殊な学校でこそはじめて可能なことだ。いかに上手に扱ったところでそれは表面だけの話、複式は必ずどこかに抜目がある。この問題と日夜取っ組み、実にやせる思いだった。

いろいろやり方を研究し、実験もしてみた。異教科の組み合わせ。同教科の組み合わせ。合同授業。形式的練習の重視。高学年の主要教科を低学年の居ない午後に回す。延長授業。遊びながら学習できる方法。道具の工夫。

低学年の助教に高学年を使う。高学年の夜学。いくら頭を絞ってみても一長一短、五十歩百歩。落ち着くところは失望だ。いろいろもがいてもみた。いろいろな教材の製作もやった。自習に



便利な様に全学年の新字表も作った。算数の自習カードも作った。体育の時間には山野を駆け巡って自然の観察にも心がけた。(後略)

こうして、私は父が描いた上の図のような小さな小学校で3・4年生の全教科を父に習い、5年生で本校に転校しました。父が校長と高等科担任を兼ねたこの学校では4・5・6年複々式学級でT先生の指導を受け、翌年4月転校、ここは6年生だけで2クラスありましたが、校舎の一部は父が教頭を務める中学校が使っていました。そして、1年後、この中学校に入学することになります。こうして、私は義務教育のほとんどを父の影響を受けて育ち、この間に「教師になる」という夢を固め、大学卒業後はへき地教育に従事することになるのです。